

ホサム・E・ナオム主教
エルサレム聖公会 首座主教
アングリカン・エписコパル エルサレム教区 第15代主教

2026年2月28日

愛するキリストにある兄弟姉妹の皆様へ

皆様もすでにご承知の通り、深い悲しみとともに報告せねばなりません。本日2月28日未明、アメリカとイスラエルによる組織的かつ大規模な軍事攻撃が、イラン国内の多数の都市および施設に対して開始されました。

両国の首脳が「先制攻撃」と称した今回の作戦により、テヘランやイスファハンをはじめとする各地に戦火と破壊が広がっており、統治の中核や市民生活の拠点までもが標的となっています。さらに、これに先立ち、イスラエルはレバノン南部においても各地を「先制」して攻撃しており、そちらの死傷者数については未だ分かっておりません。

悲劇的なことに、暴力の連鎖は恐るべき速さで拡大しています。攻撃から数時間後、イランは大規模な報復措置を開始しました。ミサイルや無人機（ドローン）による攻撃は、イスラエルおよび湾岸地域全域の米軍拠点に向けられ、クウェート、バーレーン、アラブ首長国連邦（UAE）、イラクのクルディスタン地域、ヨルダン、そしてカタールの施設が着弾の被害に遭っています。

また、聖地全域でもイランからのミサイル接近を知らせるサイレンが鳴り響きました。地中海からペルシャ湾に至るまで、人びとは突如として再びシェルターへの避難を余儀なくされています。地域全体を巻き込む全面戦争の影が忍び寄るなか、誰もが自らの命に危機を感じ、身を潜めています。

こうした事態の進展は、我々のエルサレム・中東教区の魂そのものを揺るがすものです。現在、この戦闘に従事しているすべての国、そして報復攻撃の矢面に立たされている国々は、すべて我々の管轄区域内に位置しています。イラン教区の兄弟姉妹は今まさに空爆の恐怖にさらされており、キプロス・湾岸教区の信徒たちは玄関先にまで迫る戦火を目の当たりにしています。そして、イスラエル、パレスチナ、ヨルダン、レバノン、シリアにまたがるエルサレム教区の信徒たちは、かつてないほどに高まりエスカレートする軍事的緊張の脅威に直面しています。

圧倒的な武力を前にして、私たちは主イエス・キリストの「平和をつくる者は幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる（マタイによる福音書 5章9節）」という言葉を思い起こします。今日、その召命はかつてないほど重く感じられます。「臆する霊」が私たちの心を蝕もうとする時こそ、私た

ちは「力と愛と慎みとの霊（テモテへの手紙二 1章7節）」に自らを繋ぎ止めねばなりません。

第一に、私は全世界の教会に対し、緊急かつ絶え間ない祈りに加わるよう呼びかけます。今回の「エピック・フューリー作戦」と、それに続く「壊滅的な報復」という激しい砲火に巻き込まれている母親や子供、高齢者といった無辜（むこ）の民を、神が守り抜いてくださるよう切に願います。特に、アメリカ、イスラエル、イランの指導者たちが「慎みの心」を持ち、流血の虚しさを悟って、世界的な大惨事という崖っぷちから踏み止まることができるよう祈ります。

第二に、私たちはキリストにある愛の隠れ家を互いに提供せねばなりません。それゆえ、聖職者および信徒の皆様には、安らぎを与える希望の光となってくださるよう切に願います。「政権交代」を叫ぶ言説や、軍事的な「最後通牒」が飛び交う今こそ、私たちはキリストの平和という不変の約束を伝え、互いを高め合おうではありませんか（コリントの信徒への手紙一 8章1節）。私たちの希望は、艦隊の武力やミサイル防衛システムにあるのではなく、「平和の君」のうちにあるのです。

最後に、私たちは「架け橋となる者」であり続けなければなりません。外交の窓が閉ざされようとしている今こそ、教会は和解の扉を開き続けねばなりません。テヘランであれ、テルアビブであれ、あるいは湾岸地域の軍事基地であれ、私たちは隣人を敵と見なすことを拒絶します。全世界の聖公会、そして良意あるすべての人々へ緊急の要請をいたします。今すぐ私たちのために執り成しの祈りを捧げてください。時は迫っており、危機は甚大です。私たちは「打ちのめされ、傷ついても、敗北はしていません」。人知では計り知ることのできない神の平和が、キリスト・イエスにあって、皆様の心と意思を守ってくださいますように。

キリストにあって

エルサレム・中東聖公会 首座主教

主教 Dr. ホサム・E・ナオム

聖ジョージ殉教者大聖堂

エルサレム ナブルス通り 65 番地 私書箱 19122

電話: +972 (0) 2 627 1670 / FAX: +972 (0) 2 627 3847

Eメール: bishop@j-diocese.org